

## 生涯教育研修会報告書

学発番号 第11-053号

日時：平成23年10月26日（水）19:00～20:30

場所：京都保健衛生専門学校 視聴覚室

主題：腸管出血性大腸菌の最新の話

講師：中間 慎哉 先生

講師所属：極東製薬工業株式会社 営業学術部

報告者：森 雅浩

所属：宇治徳洲会病院

分類：20点

全体参加人数：21人

京臨技のみ所属会員参加人数：

以下、講演内容など

腸管出血性大腸菌（Enterohemorrhagic Escherichia coli：以下EHEC）は1982年米国オレゴン州とミシガン州でハンバーガーによる集団食中毒事件で、患者の糞便から原因として発見された。1990年、埼玉県の子供園で汚染された井戸水が原因となった、死者2名を含む268名に及ぶ集団感染が発生した。1996年関西地区の大規模食中毒をはじめとする全国的な食中毒発生があり、その後散発的に発生が続いている。1999年「感染症の予防および感染症の患者に対する医療に関する法律」（感染症新法）の施行により三類感染症とされた（病原体は4種病原体に指定）食品分野では大量調理施設衛生管理マニュアルの一部改定によりO157→腸管出血性大腸菌に拡大した。

2010年に地研から国立感染症研究所感染症情報センターに報告されたEHEC検出数は2007であったが全検出数におけるO血清群の割合はO157が69%、O26が17%、O103が3.1%であったが抗血清が市販されていない血清群も検出されておりEHECの同定には血清群によらずVTの確認が必須である。これからの腸管出血性大腸菌検査はO157以外の菌株も多数検出されておりSorbitol陽性の集落も釣菌する必要があり出来るかぎり多くの集落を検索し従来の確認培地であるとなりの培地の本数が必要となるのでCLIG培地で大腸菌の同定を行いEHT培地にてE-hly産生有無を確認し、デュオパス・ベロトキシンによるVT1/VT2産生を確認することが望ましいとされている。血清型に関しては前述したとおり

抗血清が市販されていない血清型もあり型別の可否は問わないとされている。

今回の研修では確認培地による大腸菌確認→血清型検査→VT1/VT2産生能確認

という流れが従来の方法という認識であったが前述したように血清型別のできない腸管出血性大腸菌も存在するためこれからの検出方法はCLIG培地による大腸菌確認→EHT培地によるE-hly産生確認→VT1/VT2産生能確認→血清型確認という方法が必要である。

（ 報告者 森雅浩 ）